

2020年1月NHK中部地方放送番組審議会

1月のNHK中部地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「日本が終(つい)のすみかに！？～外国人定住者は今～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	稲村 修	(魚津水族館館長)
副委員長	東 恵子	(東海大学名誉教授)
委員	井口 昭久	(愛知淑徳大学健康医療科学部教授)
	岡安 大助	(中日新聞社取締役)
	榊原 陽子	(株式会社マザーリーフ代表取締役)
	坂田 守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
	玉井 博祐	(能楽師／玉井屋本舗社長)
	松田 裕子	(三重大学副学長)
	都築 紀理	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)

(主な発言)

<ナビゲーション「日本が終(つい)のすみかに！？～外国人定住者は今～」

(総合 1月10日(金)放送) について>

- 30年ほど前から日本に外国人労働者が増えてきたが、当時も今も外国人労働者が置かれた状況が何も変わっておらず、現代社会の問題として捉えることができた。外国人の多く住む団地では、日本人との文化の違いによるあつれきが起きることも当時からあったが、図らずも長期間定住することになり、孤独死が起こってしまっている現状について、日本人として本当に情けなく感じた。番組で取り上げた団地はNPO団体代表の川口祐有子さんのような支援に取り組む方の存在や、みなと医療生活協同組合による支援活動もあり、恵まれた環境なのではないかと思った。ただ、同様の問題は愛知県に限らず、全国各地で起こっている。番組の最後に労働力としてだけではなく、生活者としてどのように捉えていくのかという問題提起があったが、この問題について日本人は全く取り組むことができず、異質なものを嫌い、排除することばかり行われてしまっているのではないかと思った。路上生活者や孤独死の問題や、技能実習生として厳しい環境で労働を強いられていることなど、さまざまな問題があ

るため、引き続きいろいろなケースを取り上げて、日本人に問う番組を制作してほしい。

- 番組の伝えたいことが、いまひとつはっきりしない印象をもった。九番団地では、外国人定住者の割合が多くなり、短期の出稼ぎのつもりが長期にわたり住み続け、母国での生活よりも日本での生活が長いという方が大半であるという。長期にわたり住み続けるのは、そうせざるを得ない事情があるのだろうが、そこに踏み込めておらず、今の生活に満足しているのか、問題を抱えているのかも、はっきりしなかった。番組を通じて、一番訴えたいことは何かということがあいまいで、結論が述べられていないと思った。お互いを大事にすることが根本的に大切であり、日本人であろうと外国人であろうと、それぞれを尊重するという文化が必要だと思った。
- 外国人定住者の抱える問題について広く触れられていた。楽しく暮している方がいるなど、日本に定住する背景にはポジティブな側面がある一方で、今回切り取ったようなネガティブな側面もあり、複雑なテーマだと感じた。今回の団地の例だけでは語りきれない大きな問題であり、多文化共生について考えている自治体や地域は多くあるので、「ナビゲーション」として取り上げるのではあれば中部全体の状況を見ることで、より一層いろいろなことを考えられるきっかけになったと思う。番組としては、団地に住む外国人定住者の姿やNPOの取り組み、インタビューから分かるそれぞれの背景などに触れることができる、とても貴重な機会だと思った。ただ、全体の放送時間からすると、内容に入るまでのイントロダクションが長く感じ、もう少しコンパクトでもよかったのではないかと思った。今回はブラジル人移住者が取り上げられていたが、中国やベトナムからの移住者も急増している中、さまざまな国から来ている方の意見や、置かれている状況、老後の問題など、今後も考えて行くべき問題だと思う。次回は、さまざまな国の方々のことを取り上げた内容だとよいと思う。
- 今までは外国人労働者の過酷な労働環境や賃金の未払い、さまざまな問題を抱える技能実習制度など、外国人労働者の抱える問題は目にしていたが、今回は外国人定住者を捉えた内容でとても新鮮に感じた。当初は短期の予定だったが、長期滞在となってしまっていることにも驚き、母国と疎遠となり孤独死が起こっている現状や困窮する様子には、どうしてこのようなことが起きてしまうのかと考えさせられた。定住者の人々はどのような生活環境で過ごしていて、なぜ出稼ぎに来ているかなど、理解しにくいところがあった。想定外の長期滞在によって、日本語が話せなくても生活ができるという父親に対し、息子が疑問を抱いている様子は、特にリアリティを感じさせる場面だった。また、日本での暮らしの現状を携帯の電池切れにたとえていたが、とても印象的であり、ワーク・ライフ・バランスの取れていない日本の労働環境を表し

ていると、容易に想像できた。母国に帰る道中、友達にさよならが言えなかったという子どもが出てくるが、涙ながらに車窓を眺めていた様子に、大変心が痛む思いをした。専門家からは、医療や防災など生活面で、緩やかにつながることが必要だという指摘があり、お祭りや健康診断で親身に寄り添う近所の方などボランティアの取り組みが、例として紹介されていたことには示唆を与えられた。孤独死や高齢化、核家族化、社会からの孤立という社会問題は、日本人にとっても身近な問題になっているのではないか。今後は、多様な人材や働き方、多文化共生といった、お互いが共に生きられる環境が求められていると思うので、今後もこういった番組を制作して欲しい。

○ よい番組だった。複雑な問題をうまくまとめて紹介しており、それぞれにドラマがあり、丁寧な編集だと感じた。外国人定住者の孤独死については、問題が重層的に繰り返され、印象を深めていた。日本人が出てくる場面も自然に織り込まれ無理がなく、大げさに振りかざすのではなく、淡々と現状や問題を伝えていたこともよかった。短期の出稼ぎのつもりが、長期間暮らすこととなり、母国とのつながりは薄れ、日本語も話せず、賃金が安く夜も働いているというブラジル人の事例に番組が提示するおおよその課題が表されていたと思う。よく見かける車両運搬車の運転手にブラジル人が多いことは新鮮な情報だった。外国人労働者の増加という社会情勢の変化と個人の歴史が無理なく織り込まれ、番組全体に自然な流れがうまれていた。孤独死した人の生前の映像や交流があった川口さんの涙、遺体のあったベンチの映像などが番組に厚みを増しており印象的だった。遺骨になっても母国に帰れず、無縁墓地に葬られるというシーンには、家族と離れて異国で暮らす現実を突きつけられた。日本の生活をあきらめブラジルへ帰る人の物語では、母国へ帰ることの苦勞を感じ、出発の日の娘の涙や、飛行機の飛び立つシーンも効果的であった。悲しいいくつかの物語のあと、九番団地で行われている無料の健康チェックや福祉サービスの充実など、日本人がつながりを作ろうと取り組む様子には、希望を持つことができた。「私たちは生活者となっていく彼らを受け入れる準備ができていますでしょうか」という締めくくりのナレーションもよかった。

○ すごく心にしみて、感動し、涙を流してしまうくらい心が揺さぶられた。番組冒頭の軽妙なナレーションにより明るい雰囲気スタートし、何人かのブラジルの方が紹介されていたが、どれもよい話だった。団地に住むルーカスさんがインタビュアーになったことで、コミュニティに自然に入ることができ、本音を引き出すことができたのではないかと感じた。「終(つい)のすみか」という視点から考えると、働いている人はよいが、働けなくなった老後はどうなるのか非常に気になった。厚生年金などに入っていて社会保障を受けることはできるのか、働けなくなり、年金等で生活せざ

るをえないときに、生活はどうなるのかといったことは、複雑な内容であり、簡単に説明することは難しいと思うが、少しでもよいので取り上げるとよかったと思う。名古屋市ではブラジルだけでなく、ほかの国からの外国人労働者も急増しており、今後はさらに広がっていくだろう。今回の取材結果を生かし、ほかの外国人労働者の問題も取り上げ、より一般市民の目線で、外国人と日本人が結びつくきっかけとなる番組を作ってほしい。人間的な交流がすごく感じられる番組で、視聴者にも番組の意図がよく伝わったのではないかな。

○ 冒頭のアナウンサーのコメントは番組内容とあまり関係がなく、なくてもよい演出だと思った。多くの外国人が日本に暮らしていることを認識しているが、一番知りたかったと思っていて外国人定住者の実態について、今回はあまり取り上げられていなかった。その部分を導入としたほうが、もっと見やすかったと思う。短期の出稼ぎのつもりが、なぜ長期になったのかということについても、その理由を知りたかった。なぜ長期滞在に至ったのか知ることが、さまざまな問題の解決につながっていくのではないかなと思った。外国人定住者の孤独の問題として、身元の確認ができない事例や、困ったときの相談相手が同郷人以外にないというデータを紹介していたが、分かりやすかった。夜のアパートの明かりがほとんどついていない様子は、裕福でない、孤独であるということを表わしておりよかった。行政の対応や健康保険や年金などへの加入状況が気になった。サポートも拒み病院に行かないのは、経済的に厳しいと感じているからなのか、人に迷惑をかけたくないというような複雑な感情があるからなのか、もう少し深掘りするとよかった。無縁墓地を初めて見て驚いたが、葬儀費用は行政が支援してくれるのかも知りたかった。遺骨になっても母国に帰れないというナレーションがあり、枯れ枝の向こうから飛行機が飛んでいくシーンは、なかなか衝撃的だった。外国人定住者が、日本に来てよかったのか、どう思っているのかということが一番知りたかった。そこを踏まえた上で、日本人としてどうあるべきかを投げかけると、さらにより番組になっていくのではないかな。

○ 継続的に取材、制作を続けているということだが、外国人定住者の問題を考える上で、その背景やねらいがしっかり読み取れなかったことで、多くの疑問があふれた。なぜ九番団地には外国人がこれほど多いか、なぜ短期滞在の予定が長期化したのか、なぜブラジルに帰らないのか、そもそもブラジルに帰りたいのかも分からなかった。約100人のブラジル人への対面調査の結果として、滞在年数と、滞在予定年数と、困ったときに相談できる相手についてのみで、もったいなかった。本当に知りたいのは、日本に住んで、どう思っているのか、何に困っているのか、満足しているのか、帰りたいのかどうかということで、帰れないとしたら、その理由は何なのかということである。医療や社会保険に関しても、企業側の問題なのか、本人の問題なのか、どこに

根本的な問題があるのか分からず、いろいろと疑問を持ってしまった。せっかくのインタビューだったので、もっと深く聞き取りをして、困っていることを番組の導入にすると、もっと見やすくなったのではないか。また、番組タイトルが気になった。すごくネガティブな印象を受けるととともに、取り上げているのが九番団地の日系ブラジル人に限られているにも関わらず、外国人定住者と定義していることが適切なのか疑問に感じた。また、孤独死やホームレスの問題は、日本人でも同じことが起きているため、適切な事例だったのか分からなかった。なぜこのテーマを取り上げるのかということについて、外国人を含めた福祉における地域共生を描きたかったのか、多文化共生の実現に向けて必要なことを描きたかったのか、どちらを描きたかったのかも気になった。実際に住んでいる外国人が何を望んでいるのか、その人たちの考えや思いがもっと伝わってきたら、よい番組になったのではないか。

○ 非常によくできていて、練られた内容だった。ただ、この番組は誰に向かって訴えているのか気になった。「私たちは彼らの人生を受け入れる準備ができていますでしょうか」という結びは、日本に来る外国人労働者が増えていて、苦しい思いをしている人がいることに対するものだと思うが、はたして今回取り上げた問題は全員が抱えているのだろうか。苦しい思いをしていない方がいたら、この問題はどうか映るか。番組の指摘は間違っておらず、今回の取り上げ方でよかったが、今は日本でも故郷に錦を飾るといようなことが難しくなっている。受け入れる側にも問題があるのは事実だが、外国に行き生活する側の視点や課題を入れていけないといけない。ことばが分からず、ストレスがかかるところに働きに行き、どこで死ぬかということまで考えなくてはいけない。さまざまな事情があるなかでも自分の意思で日本に残っているとすれば、その部分も押さえなければ、この問題の出口にはつながらないのではないか。

○ ことばの問題は重要で、難しいと思った。「沈黙は金」「触らぬ神にたたりなし」ということが日本人の気質としてあり、外国人のことを見て見ぬ振りをしてしまいがちであるが、今やそうも言っていられない時代ではないか。綿密なインタビュー、親子や団地の様子、専門家の解説もわかりやすかった。2020年の今こそ、“世界人”としての心構えをもち、人が人として尊重され、尊敬しあえる社会が一步でも前に進めばよいと思った。

○ 「なんとも出口が見えない」ということが最初の感想である。何を問題点として扱っているのか、少しあいまいで分からなかった。外国人定住者の高齢化が問題なのか、予定外に長く定住してしまったことが問題なのか、孤立している事が問題なのか、判然としなかった。60歳を過ぎれば、外国人でなくともいずれ収入は先細り、健康の不安も増し、孤独感も募っていくことが多いだろう。そのなかで年金や保険など、老後

に必要な外国人労働者のバックボーンはどうなっているのか、どのような立場や資格で在留しているのか説明が欲しかった。九番団地の外国人比率が3分の1以上ということを知った。防災や教育をつなげるためのキーとすることはよいことだが、この地域は海拔0メートル地帯であるため、特に災害時の助け合いが大事だと思う。もう1つ、ことばの壁については、翻訳機などの最新の機器が、国やことばの壁をこえていく原動力になるかもしれないと考えた。つながることは大事だが、外国人労働者の今後の諸問題の突破口になるのかということ、それだけの突破力はないように感じた。多くの日本人の期待が、格安で便利な労働力という上から目線であり、リスペクトに欠けた考え方が問題の真因なのではないか。問題について、もう少し掘り下げが必要ではないか。

(NHK側)

九番団地の住人約100人に対面調査をしたが、25分という限られた放送時間の中で数家族を紹介するにとどまった。アンケート調査では20項目以上を聞いており、まだ多くの素材があるため、引き続き、別の角度からも番組を作りたいと考えている。外国人労働者の社会保障制度については、この番組では伝えきれなかった部分があって、もともとは短期での滞在を予定していたため、年金を受け取ることができる人は少ないが、生活保護という支援が徐々に進んでいる。逆に、生活保護に頼らず、ずっと働きたいと希望される方が増えていて、それが結果として健康諸問題につながっているということもある。次は九番団地に限らず、全国の外国人定住者が直面していることを広い視野で伝えていけたらと思う。外国人労働者が日本に居続けるという状態がすでに生まれていることから、今回の番組では定住者という言葉を使った。外国人労働者数は増加していて、関心が高まっている。また、東京オリンピック・パラリンピックで外国の方が日本に多く訪れるということも視野に入れて、多角的に掘り下げていきたい。

<放送番組一般について>

- 12月28日(土)の「ドラえもん50周年 みんなみんなかなえてくれる♪ ひみつ道具と科学」(総合 後7:30~8:43)を見た。ドラえもんが50周年になることのほか、NHKで取り上げたことにも驚いた。また、糸なし糸電話は携帯電話、ほんやくコンニャクは音声翻訳機という形で、ひみつ道具がいくつも実現されていることと、作者の先見性にも驚かされた。一番ほしいひみつ道具のアンケートで、60歳以上と5~9歳での1~3位が同じだったことがおもしろく、世代を問わず万人の

求める未来を描いたすばらしい作家なのだと感心させられた。ひみつ道具登場時の世相の紹介は、あまり意味がないと感じた。スタジオセットはのび太がよく遊ぶ空き地を再現していたが、隣の家の2階の中など、詳細までしっかり作られていた。さらに、ひみつ道具をとりよせバックで持ってきたり、時間経過とともに徐々に夕暮れになっていたり、細かい部分にまで工夫が見られた。内容が盛りだくさんで、子どもだけでなく親も一緒に、全年齢の人が楽しめるよい番組だったと思う。

- 1月4日(土)の「あなたも絶対行きたくなる！日本最強の城 明智光秀スペシャル」(総合 後 9:00~9:59)を見た。福知山城の石垣に寺社で使われていた石塔が使われていることなど、城のことをつぶさに知ることができた。そのほか、四季を感じる写真や空撮映像など、多岐にわたる視点で城を紹介しており楽しい番組だった。地元の人たちにあまり知られていない内容もあって、とてもよい番組だった。福井市の一乗谷城やその城下町が取り上げられたことはうれしかったが、城下町中心だったので、城の魅力ももっと紹介してほしいかった。谷全体がひとつの城であるという説明があったが、谷に暮らしがあり、山城で谷を守っていたという関係性にも触れてほしいかった。この番組のほかにも大河ドラマ「麒麟(きりん)がくる」の放送にあわせて、関連番組が数多く放送されていたが、周辺情報がきちんと深掘りされており楽しめた。
- 1月6日(月)のファミリーヒストリー「パンダ・彩浜(サイヒン)～和歌山・白浜パンダ一家のルーツ」を見た。中国まで行ってデータベースをたどり、その過程で、第二次世界大戦中も文化大革命の最中もパンダを保護し続けてきた中国の関係者の努力や熱意が見えてきて、すばらしいと思った。白浜パンダ一家の系譜を追ってみると節目節目でさまざまなドラマがあり、その時その時の飼育員の努力や献身、愛情には心を打たれるものがあった。それがよく伝わる編集だったので、とてもよかったと思う。
- 1月7日(火)のクローズアップ現代+「“桜づつみ”と高校生～2020・被災地からの問いかけ～」を見た。今年の台風19号からの復興はまだ途中であることを、地元の高校生たちが小学生のときに地域を何度も襲った水害をテーマに歌を作ったこととおして紹介しており、高校生の視点から見た災害が深く印象に残る番組だった。また、当時の担任の先生が教え子たちと再会した時に思わず泣いてしまった場面に感激した。
- 1月8日(水)の歴史秘話ヒストリア「あらためて知りたい！明智光秀」では、最新研究によって分かったことを紹介していた。番組では以前、明智光秀は延暦寺の焼き討ちに消極的だったと説明したが、実は前向きだったと言っていたので、これまでの

番組の説明から変わったことも含めて伝えたことにより誠実さが感じられた。番組の最後、福井市に明智光秀をまつっている木像があって集落の人がお参りしていたので、福井県にもそういったゆかりがあるということを改めて知ることができ、とてもよい番組だったと思う。

- 1月10日(金)のいしかわ令和プレミアム ザ・ディレクソン「ISHIKAWA no SHIKKE～石川の湿気～」(総合 後7:30～8:13 石川地域)を見た。視聴者が集まり、みんなで意見を出し合っただけで番組を作る手法が目新しく、また、若い人の意見は画期的で驚かされるものが多かったため、視野が広がる番組だったと感じた。
- 1月11日(土)のあなたが主役50ボイス「麒麟(きりん)がくる」(総合 前8:15～8:58)を見た。明智城跡はボランティアによって維持されていることが紹介され、こういう場所にこそ多くの人たちに訪れてもらいたいと思った。年明け以降、「麒麟(きりん)がくる」の関連番組が非常に多かったように感じて、すでに本編を見た気分になってしまい、逆効果にならないのかと感じた。放送前からここまで力を入れる必要があるのか疑問に感じた。
- 1月11日(土)のあなたが主役50ボイス「麒麟(きりん)がくる」で「麒麟(きりん)がくる」の舞台裏や出演者のメッセージを紹介していた。また、1月14日(火)の「麒麟(きりん)がくる まで待てない! 戦国大河ドラマ 名場面スペシャル」(総合 後7:30～8:42)で過去の大河ドラマでの印象的なシーンを紹介しており、おもしろかった。19日(日)からの「麒麟(きりん)がくる」の放送が待ち遠しくなる番組だった。
- 1月11日(土)のNHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」を見た。長谷川和夫さんを認知症の早期診断を初めて確立した医師と紹介していたが、早期診断のためのスケールを開発したが正確ではないか。患者にデイサービスを勧めていた長谷川さん自身が、もう2度と行きたくないと思っていたのは印象的だった。明るくりんとした妻の様子も映っており、彼女の存在が長谷川さんを支えているのだろうと感激した。この番組では、2年間、認知症の進行を抑えられなかったことを示したとも言え、早期から診断を下すことの是非についても提起しているのではないかと感じた。最前線で研究していた専門医の認知症を記録しているので、とても貴重な番組だと思う。
- 1月11日(土)のNHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」を見

た。ストレートで訴求力も抜群なタイトルがすばらしいと思った。タイトルどおりのドキュメンタリーで、認知症の進行に伴う葛藤やもどかしさを専門医本人のことで記録し、さらに、支える家族の不安や混乱についても時系列で記録しており、とても意味のある番組だと思う。含蓄のある本人の言葉にはすごく重みがあり、それをうまく生かした構成だった。さらに、視聴者が偏見を持たないような中立的な描き方もすばらしかった。デイサービスへの違和感や疎外感、孤独感から利用を中止し、自宅での生活を選んだ場面で、医師や家族が準備する環境が本人に必ずしも合うわけではないことや、本人の意向を尊重する大切さ、支える家族の大変な覚悟が非常に強く伝わってきた。認知症と自覚しているが、見える景色は以前と変わらないと言っていたことから、認知症への偏見によって周囲が変に差別的な対応をすることで、本人の人間としての尊厳を奪いかねないことを思い知らされた。自身の姿を発信する強い気持ちに感服したが、長期間取材した取材者の努力にも敬意を表したいほどのすばらしい内容だった。ただ、語りがか細い声に感じられたのが少し残念だったので、アナウンサーによる語りでもよかったのではないかと感じた。

- 1月11日(土)のNスペ5min.「シリーズ 食の起源 第3集“脂”発見!人類を救う“命のアブラ”」と1月12日(日)のNHKスペシャル シリーズ 食の起源 第3集「『脂』～発見!人類を救う“命のアブラ”～」を見た。人間にとって必要な油について、人類の歴史やミイラ、イヌイットなど、数々の研究成果を盛り込んで紹介しており、とてもおもしろい番組だった。中條誠子アナウンサーの落ち着いた安定した読みがよかった。ただ、「Nスペ5min.」の内容が分かりやすく、番組の結論部分を端的に紹介していたため、この番組だけで十分となりかねないと感じた。
- 1月13日(月)の「NHKナゴヤニューイヤーコンサート2020」(総合 後1:05～2:17 中部ブロック)を見た。会場で見たコンサートを改めてテレビで見るとは初めてだったが、指揮者や演奏者のアップがたくさん表示され、会場では分かりづらい表情などを見ることができ、とても楽しかった。歌劇「蝶々夫人」から「ある晴れた日に」の紹介では浅田真央さんが滑っている映像を入れたり、クラシックの作曲家と印象派絵画のつながりの紹介では絵画の映像をうまく入れたり、構成が工夫されていてよかった。絵画の解説などもあったため、テレビでコンサートを見るのも、理解が進んでおもしろいと感じた。舞台やコンサートなどをテレビで見直せるのはよいことなので、これからも同様の番組を放送してほしい。
- 1月13日(月)の「NHKナゴヤニューイヤーコンサート2020」を見た。コンサートの魅力が凝縮された内容になっていた。会場では遠くて分かりづらかった演者の表情やバレリーナの踊り、衣装の変化などが、テレビではクローズアップされ、鮮

明に見ることができた。さらに、各場面のコンセプトも分かりやすく紹介されていてよかった。いろいろな角度の映像が使われており、会場での観賞とは違った臨場感を楽しめる番組となっていた。「蝶々夫人」の曲紹介で浅田さんの映像を入れるなど、テレビ番組ならではの効果が出ていたと思う。単にコンサートを伝えるのではなく、番組独自の世界観を作り、さらに魅力的にしていたので、会場で見たあと、さらにテレビで見る2回目の楽しみもあるのだと思わせられる番組だった。東京オリンピック・パラリンピックでも同じように楽しめる番組が放送されることを期待したい。

- 1月14日(火)の「かがのとイブニング」でのインタビューを見た。東京オリンピック開催前に東京国立近代美術館工芸館が金沢市へ移転する予定であることから、近代美術館工芸課長の唐澤昌宏さんが出演し、新しい建物も紹介され、完成が待ち遠しくなる内容だった。
- 1月14日(火)のプロフェッショナル 仕事の流儀「人を癒やし、人に癒やされる～ひきこもり支援・石川清～」を見た。20年間で500人もの引きこもっている人と会っているのはすばらしい活動だが、相手から偽善者野郎と言われている場面では支援の難しさも伝わり、なかなか解決にはつながらないようにも見え、少し絶望的な思いになってしまう内容だった。ただ、引きこもりから抜け出したいと思っている人には、こういった選択肢もあるのだと分かってもらえる内容だったので、必要としている人たちにはしっかり届けられる番組だったのではないかな。
- 1月12日(日)の日曜美術館「マネ 最後の傑作の秘密～フォーリー＝ベルジェールのバー～」で、マネの作品について、多視点で描かれていることが紹介されていた。多視点による絵画表現は、セザンヌやピカソが有名だが、マネが先駆けて表現していたことに驚いた。とても見どころのある内容で勉強になる番組だった。
- 1月8日(水)の「海底の花園 サンゴの美～沖縄 慶良間諸島～」(BS1 前3:00～4:00)を見た。緊急報道に備えて深夜にこのような番組を放送していることをもっと伝えてもよいのではないかな。また、動画を持っている人はたくさんいると思うので、それを広く集めて編集、放送すれば、人気のある番組になるのではないかなと感じた。
- 1月7日(火)のBS世界のドキュメンタリー「スエズ運河 メガ建築の大拡張」を見た。スエズ運河について、産業革命の中で建設されたこと、船の大型化への対応の大変さ、中東戦争を乗り越えてきたことなど、歴史的な映像もふんだんに盛り込みながら伝えており、興味がひかれるおもしろい番組だった。競争相手でもあるパナマ運河についても紹介されていれば、もっとよかったのではないかな。フランス視点の内

容になっていると強く感じられたので、フランス制作であることがもっと分かりやすく伝わるとよかった。

- 1月15日(水)の探検！世界の水族館の舞台裏「アメリカ・フロリダ水族館」(BSプレミアム 後 9:00～10:29)を見た。出演者のリアクションがやかましく感じられた。水族館本来のよさを紹介したいのであれば、出演者を子どもにし、心の底から出てくる驚きを伝える手法がよかったのではないか。出演者が悪いわけではないが、大人がはしゃぐ姿からは、わざとらしさも感じた。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局